

実は嬉しさでいっぱいなの
でした。みんなはタバ
コをくわえてマッチをす
ったり、楽器をケースへ
入れたりしていました。
ホールでは、まだパチパ
チ拍手が鳴っています。
それどころではなくなり
いよいよそれが更に高くな
って、何だか怖いよう
な手がつけられないよう
な音になりました。大き
な白いリボンを胸につけ

た司会者が入って来ました。
「アンコールの拍手
がおきていますが、何か
短いものでも演奏してや
ってくださいませんか」
すると楽長がキツとなっ
て答えました。「いけま
せんな。こういう大物の
あとへ何を出したってこ
っちの気の済むようには
いくものでないんです」

「では楽長さんが出て、
少しあいさつしてくださ

いませんか。」「だめだ
おいゴーシュ君、何か出
て、ひいてやってくれ」

「私がですか。」ゴーシュはあっけにとられました。「君だ、君だ」ヴァイオリンの一番の人もいきなり顔をあげて言いました。「さあ出て行きたまえ。」楽長が言いました。みんなもセロを無理やりゴーシュに持たせて扉をあけると、いきなり

舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその穴のあいたセロをもって実に困ってしまって舞台へ出ると、みんなはそら見ろというように、一層ひどく手を叩きました。われるような拍手が鳴り響きました。